

## 2021年奄美大島南部リーフチェック結果報告書

- ・ 実施日時：2021年12月16日（水）14:00～17:00
- ・ 主催：瀬戸内町海を守る会
- ・ 調査地：瀬戸内町安脚場沖
- ・ チームリーダー(TL)：祝 隆之（瀬戸内町海を守る会会長）
- ・ チーム科学者(TS)：興 克樹（奄美海洋生物研究会会長）
- ・ 参加者：16名（瀬戸内町海を守る会14名、瀬戸内町役場1名、奄美海洋生物研究会1名）

### ○調査概要

当調査ポイントでのリーフチェックは、21年連続21回目の実施である。2001年から2005年にかけて、奄美大島南周辺海域では、オニヒトデが大量発生しサンゴは壊滅的なダメージを受けたが、調査地点は、2002年6月にサンゴ保全海域に設定、継続して駆除が行われサンゴ群落が保全されて優れた海中景観が保たれており、ダイビングやシュノーケリング等の観光資源としても活用されている（投錨によるサンゴ破損を防止するため海を守る会では係留ブイを設置）。調査地点は、加計呂麻島安脚場沖の約200mに広がる礁斜面。水深5mと水深10m地点にそれぞれ100mの測線を設定し、測線におけるサンゴの被度や魚類指標種の数、無脊椎生物の数など指定された項目について潜水調査を行った。

### ○調査結果

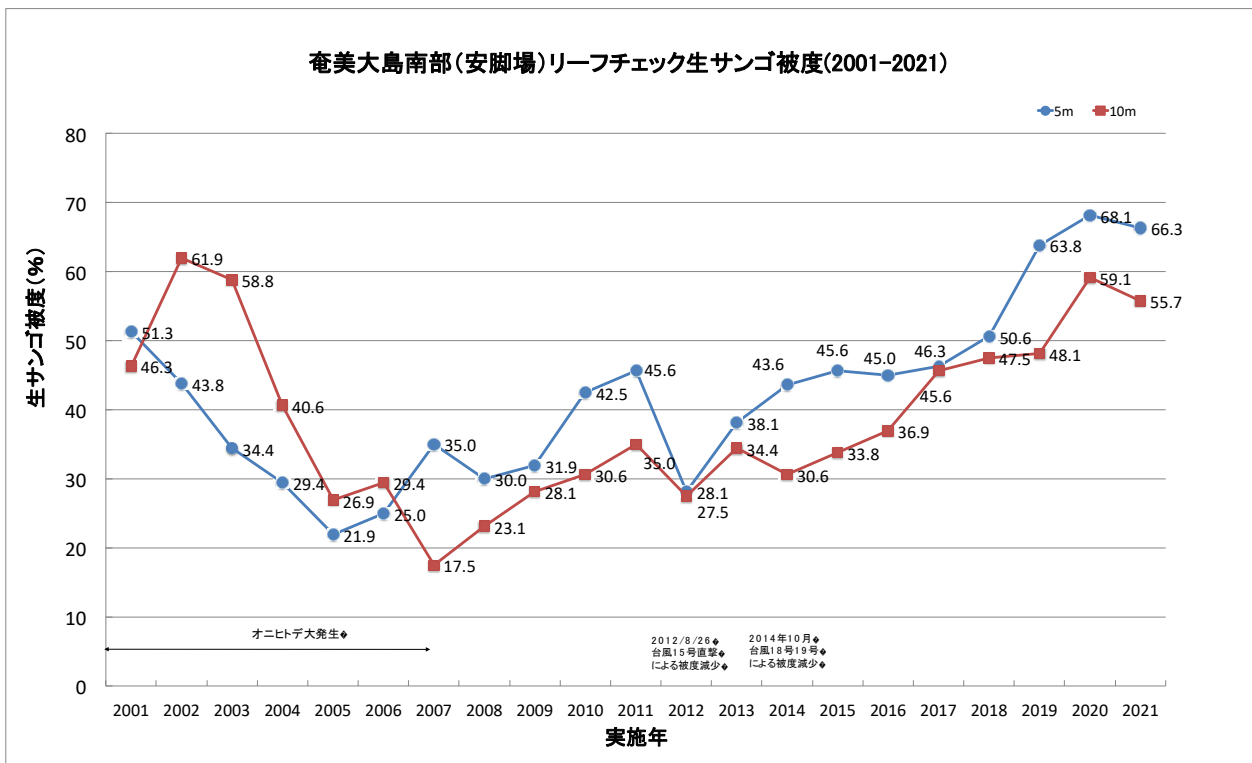
奄美大島では2021年はサンゴの白化現象発生や台風の接近も無く、本調査においてサンゴの白化や破損はみられなかった。生サンゴ被度（海底に占める生きたサンゴの割合）は、5m測線は66.3%、10m測線は55.7%と両側線で微減したが、サンゴ群集は良好な状態であった。

水深5m測線では、生サンゴ被度が2020年68.1%から2021年66.3%と微減した。白化群体やオニヒトデ食痕はみられなかった。新規加入のサンゴが少ない状態が続いているが、ドーンミドリイシやヒメマツミドリイシ等の樹枝状ミドリイシ大型群体が生存している。魚類出現数はチョウチョウオ類は2020年24個体、2021年23個体とほぼ同数であった。無脊椎生物ではシャコガイ類が2020年12個体から17個体と増加した。オニヒトデはみられなかった。

水深10m測線では、測線前半は樹枝状ハマサンゴ類やコモンサンゴ類が優占し、側線後半は樹枝状ミドリイシ属が優占する。生サンゴ被度は2020年59.4%から2021年55.7%と微減した。魚類出現数はチョウチョウオ類が2020年21個体から2021年11個体と減少、無脊椎生物はシャコ貝類が2020年6個体から2021年10個体と増加した。オニヒトデはみられなかった。

両測線とも新規加入のサンゴは少ない状態が続いているが、大型ミドリイシ群体が生存しており、幼生の供給源や観光資源としても重要である。21年間サンゴが壊滅する事無く保全されていることは、サンゴ礁保全の成功例といえる。また、近年のボートシュノーケリングツアーの増加に対応するため、海を守る会ではダイビング用の係留ブイに加え、今年、同海域浅所にボートシュノーケリング用の係留ブイを設置し、サンゴ礁の適正利用を推進している。

(調査結果)





(調査写真)

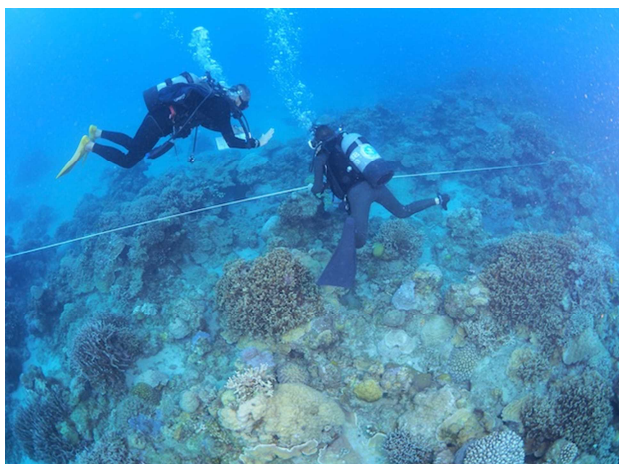


図 1. 水深 10m 側線 始点付

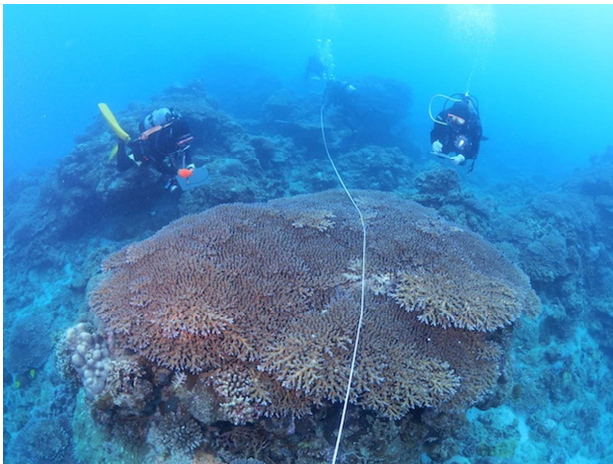


図 2. 水深 10m 測線

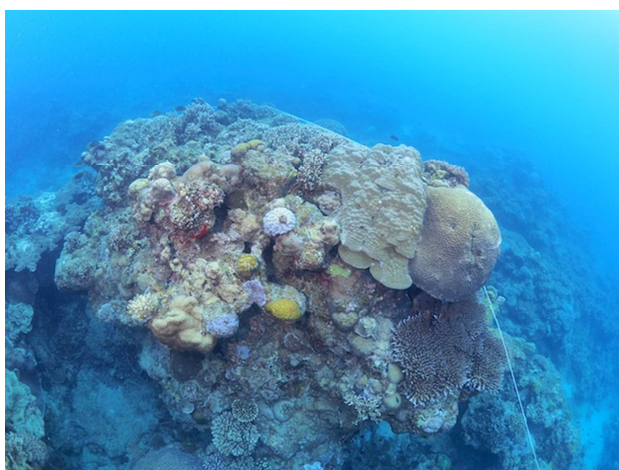


図 3. 水深 10m 測線 終点付近

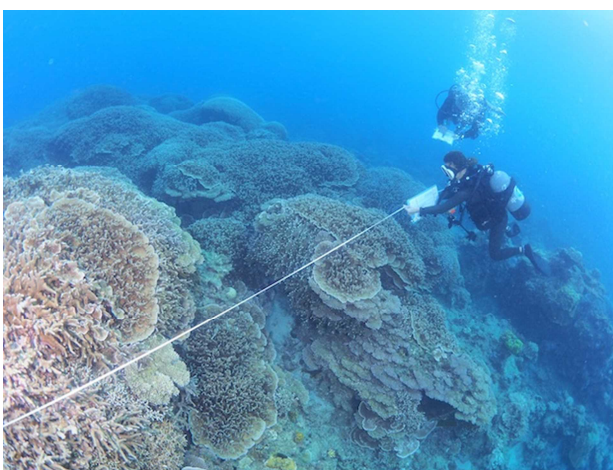


図 4. 水深 5m 測線 始点付近



図 5. 水深 5m 測線付近

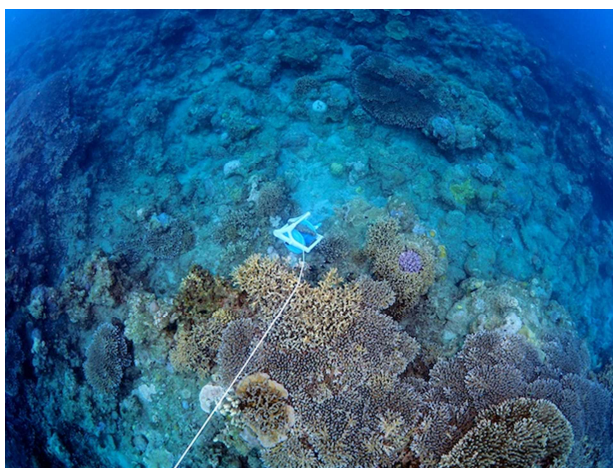


図 6. 水深 5m 測線 終点付近